

## 対象と身体との関係——メルロ＝ポンティの知覚論とモリスおよびセラの彫刻作品

大前美由希（慶応義塾大学）

モーリス・メルロ＝ポンティの思想は、1962年に『知覚の現象学』が英訳されたこともあり、1960年代のアメリカにおいて、ミニマル・アートをはじめとするモダン・アートの作家や批評家たちにしばしば参照されるようになった。彼の思想の中心は、主観と客観、精神と物体といった二元的対立を越えた身体と世界のあり方の解明にあるが、ミニマル・アートにおいては、作品の再現性が極限まで排除され、作品が表現する内容に観者の意識を没入させることが拒絶された結果、作品が展示されている場や観者による作品の知覚それ自体が問題となってきた。本発表では、作品の物質性を強調することによって観者に自らの身体的なあり方を意識させる彫刻作品と、身体を中心としたメルロ＝ポンティの知覚論とを比較しながら、現代芸術における対象と身体との関係について考察する。

1960年代後半におけるミニマリズムの彫刻作品は、身体、時間、場所を、その主題として取り上げるようになった。そのなかで、メルロ＝ポンティの思想との比較において注目されるのは、ロバート・モリスとリチャード・セラの作品である。モリスは、作品が置かれた場のなかでの作品と観者との関係を問題とする。彼の作品《Untitled (Three L-Beams)》等は、その形と大きさによって、観者自身に自らの身体を意識させ、作品に対する知覚のあり方を問い直させるような性格を有している。一方セラは、例えば《Shift》において、作品が置かれた場のなかで観者の視点の推移によって変化する作品のあり方を重視する。観者は、自らの移動にともなう視覚の変化を通じて、固定されたイメージに束縛されることなく作品を体験し、時間と空間の推移のなかで作品と自己との関係を知覚する。このように彼らの作品では、それぞれの形で、メルロ＝ポンティが論じる知覚の恒常性や世界への投錨点としての身体のあり方が問題となっている。

メルロ＝ポンティは、その晩年において、身体を「見るものであると同時に見えるもの」、すなわち世界へまなざしを向ける者であると同時に他の物と同様に世界のなかに存在する物であると捉えている。そして、セザンヌに代表される絵画を、このような「身体の謎を図解」してくれるものとみなす。一方、モリスやセラの彫刻作品は、再現的イメージを用いることなく、そこに実際にある物としての作品およびそれが置かれた場を通じて、身体が物を知覚するプロセスを呈示している。それ故、対象と身体との関係について両者の違いを述べるならば、メルロ＝ポンティにおいては、描かれた対象である

「見えるもの」を通じて「見えないもの」としての身体が独特な形で現れるのに対して、ミニマリズムの作品においては、描かれていない物質である「見えるもの」を対象として「見えないもの」としての身体が、現れるというよりは、体験される、とすることができる。